

勤務医部会だより

還暦越え一外科医の葛藤 (世の流れは腹腔鏡下手術?)



幹事 川崎晋吾
(済衆館病院 院長)

済衆館病院 院長の外科医 川崎晋吾です。当院は、1914年(大正3年)創業以来今年で107年になります。名古屋市北部に接する北名古屋市・清須市・豊山町の地で地域に根ざした医療を行っております。

当院は、尾張のスーパーケアミックス病院として、病院規模331床(急性期108床、地域包括ケア60床、緩和ケア20床、回復期を含めた療養病床143床)・介護医療院38床(2020/10/1開院)・健診ドックセンター・腎透析センター・デイケアセンター・デイサービスセンター ムクの木・訪問看護ステーションとそれぞれの役割を担った病棟・部署を整備し、地域住民の皆様が離れた医療機関に赴く必要がなく、救急医療から在宅復帰の支援まで、地域内で安心して医療と介護を受けていただけるような病院をめざして、今日に至っております。

さて、私事を話させていただきます。私は、卒後昭和60年6月、国立名古屋病院(現・名古屋医療センター)で研修を始めました。研修開始当初は、循環器内科を志望していましたが、研修期間中に外科の先輩方の影響もあり、外科に心変わりして(させられて)名古屋大学第二外科に入局、消化器外科医の道を歩み始めることとなりました。今回、『勤務医部会だより』コラムの執筆依頼者である勤務医部会部長 杉田洋一先生にも、外科研修期間中には大変お世話になりました。当然、当時は腹腔鏡下手術はまだ流行っておらず、消化器外科手術はすべて開腹術でのトレーニングを受けて育てていただきました。その後、平成元年2月国立東名古屋病院(現・国立病院機構東名古屋病院)勤務を経て、平成2年8月に名古屋大学第二外科腫瘍グループ(いわゆる丸C)に帰局、その後平成4年7月に一宮市立市民病院に赴任。そこでようやく胆摘術を腹腔鏡下で行うようになりました。平成20年4月に済衆館病院に

赴任してきましたが、自分で執刀する手術は、胆摘術・虫垂切除術・内ヘルニア手術以外はなかなか腹腔鏡下で行う気になれず、数年前より腹壁癒痕ヘルニアを腹腔鏡下にintraabdominal approachにメッシュ補綴するようになった程度です。(確かに肥満気味の大きな腹壁癒痕ヘルニア手術は、開腹手術より明らかに理にかなった手術です。)自分より若手の先生の大腸癌腹腔鏡下手術の助手のお手伝いやカメラ持ちはしますが、大腸癌や胃癌の手術を、いまだ腹腔鏡下に自分で執刀する気(勇気)にはなかなか出来ません。しかし、世の流れはどう見ても腹腔鏡下手術です。なんとかせねばと、“がん@魅せ技”を観てイメージトレーニングをして、いつでも執刀出来るように勉強はしています。平成31年4月より院長職を拝命しましたが、実働外科医は自分を含め2名(令和2年11月よりようやく1名若手が増員)なので、一外科医に過ぎません。鼠径ヘルニア・虫垂切除を始め、担当症例はなんでも執刀しております。まだまだ進化しなければならないと思う反面、慣れた開腹手術の方が安全に、しかも短時間に来るとの考えが勝ります。還暦を過ぎた先生でも腹腔鏡下手術を行って見える方もみえるようなので、これから先、今しばらくは年を重ねてもまだ外科手術が出来ることに感謝して、症例を選んでにはなりますが、大腸癌の右半結腸切除やS状結腸切除術ぐらいは腹腔鏡下に執刀できるようにと、もう一息精進しようかと思っております。